世俗世界における教会の共同の責任 (2)

竹　中　正　夫

前回において，今日教会が産業社会における責任を考えるにあたって，前提として強調されている三つの理解について考えた。それらは，(1)聖書に根ざしたこの世界の理解　(2)教会の働きにおける信徒の聖務についての理解　(3)この世界に対する教会の働きにおける一致の理解の三つの点であった。

産業社会の急激な進展の中にあって，キリスト者は聖書に根ざして世界に対する理解を深め，この世界の混沌と激変の中にも，この世界に対する希望にみちた態度を失わない。彼は，そのおかれている場所において，各自に与えられているそれぞれの賜物を生かして，人間性の回復のために，一致して働くように召されていることを学んだ。本稿においては，具体的な産業社会の進展のなかに，とりわけ信徒が日常生活を営むにあたってどの様な基本的な態度をもって，労働に励むかという職業の倫理の課題を中心に検討をすすめたい。

職業の倫理の確立

変転してゆく社会にあって，人間は働くことを止め得ない。人間の労働の種類は変ってきても，人間が働く存在であることには変りない。人間の労働条件や内容が異ってくるとその意味の検討が重要な課題となってくる。いままでの社会において通用していた労働観や職業の倫理が新しい状況においてあてはまらなくなり，人々は新しい意味を求めて新しい探索をする。ときにはそれが得られないと惰性で生きるようになり，労働が習慣となり，意味の喪失から人間は，機械的な作業をする動物となる。人間はどんな小さな仕事をしていても，その労働の意義を問う。そして，その労働に意味を見出すときに生き甲斐を覚える。

キリスト教は，逞くましい労働観を歴史の中に提拱しつづけてきた。これは，キリスト教の歴史に対する大きな貢献の一つであると思う。聖書においては，その創世紀から黙示録に至るまで，終始一貫して，神は「働く神」として証され啓示されている[1]。神はすべてのものの創造者であり，支配者であり，すべてのものの和解者，救贖者であり，彼の計画と意志は，イエス・キリストにおいて具現され，またおわりのときに成就されるという信仰を聖書は証している。歴史を舞台として，創造と贖罪の劇を展開する「働く神」というイスラエルの神観は，歴史の中における人間の働きにダイナミックな力を与えてきたことは事実である。聖書の中における怠慢をいましめる教えや，勤勉をすすめる教えは単なる倫理的教訓ではなく，働く神に答える働く人間の責任をとらえた信仰に根ざす倫理である。

ギリシャの哲学者たちは，その社会を考えるに一つのピラミット的階層社会を考え，一番下に，奴隷をおき，次に軍人が位し，一番上に哲学者が配置され，社会を統御することが考えられていた。そして，各階層に属するものは，それぞれにふさわしい徳を培うことが課せられ，奴隷は「つつしみの徳」，軍人は，「勇気」，哲人は「叡知」を得，社会全体は，「正義」によって律せられるものとされていた。ここにおいて，知的な洞察をなすものが社会的指導者となり，肉体的労働にあずかるものが，下部の底辺をなしていた。

つぎにあげたアリストテレスの言によると，ギリシャの労働卑賤の思想をよくうかがい知ることが出来る。

「労働は人をして徳義の実行を不可能たらしめる。それは肉体を退化させる計りではなく利益を目ざすという点で精神をも堕落させる。殊に肉体労働を必要とする職業は，最も奴隷的であって，手工業および労働者の生活は卑賤であり，徳義と没交渉である。故に若き市民は，これら下等な職人の仕事に従事してはならない[2]。」

また，東洋の宗教においても，労働の尊重を積極的に支持しているものは少い。たとえば，印度のヒンドゥ教では，四つのカストがみとめられ，それは，ブラーフマナ（祭司），クシャトリヤ（王族武士），ヴァイシャ（農工商・庶民），シュードラ（奴隷）・の四つに分たれ，カーストの下に最下級の不可触賤民（パ

リア）があった。これらのカースト制は宗教的な理念によって判然たる区別がつけられていたのみでなく，その上下の差は，世俗的労働の性格によって決められており，しかも，それは世襲となっており，全く個人の自由と尊厳が，労働の場では認められず，「諦め」の思想が強くなってきている。

中口，韓国，日本などの伝統的な倫理の形成に与って力あった儒教においては，立身出世のための労働は尊しとされたが，社会全体には依然として，ピラミッド的階層体制が強く，上下の関係に貫らぬかれた支配の秩序があり，個人の人格の自由を認めつつ，各個人の社会における労働の価値を尊重する考えは極めて少かった。

明治の初年，いちはやく基督教徒となった小崎弘道は，自らが訓育をうけ，また当時の日本の社会秩序の根幹をなしていた儒教の理念の封建的支配関係をみぬき，痛烈な批判をなしている。

「是唯上下貴賤尊卑治者被治者の別の一端なる君臣の秩序を述べたる者なるも聊か以て此区別の厳格なる一斑を示すに足れり。此区別の詳細に渉れば曰く君臣，曰く父子，曰く夫婦，曰く長幼，彼の五倫と称するものの中唯朋友の一を除くの外皆な此区別を示さざるなし，乃ち君父夫長は上にして貴く且つ尊くして令を出だし教を為し制度を立て之を司る者なり臣子婦幼は下にして賤く且つ卑くして其令を聴き其教を受け，其制度にて支配せられ之が管理を受くる者なり国家より云えば君は無上専制の主，一家族に於ては父たり夫たる者無上の執権者，郷党にては長者は其統御者にして其余は皆な其の統治を受くる者にて唯命令に従うを以て其分とす。斯くて其社会は至上至下唯一線維の上下貴賤尊卑の別にて連結し宛（さな）ながら井然たるピラミッドの佇立するが如く其秩序の厳然たる実に天下の美観なりと云うべし[3]」

また，日本人は「よく働く」といわれ，その勤勉さが，戦後のおどろくべき経済成長をとげさせた一因であるかの様にいう人もある。その場合，何故日本人が勤勉であるかという原因をさらに問うてみると必ずしもその根拠は明白でない。二宮尊徳のように立身出世し，忠孝をもって励むという儒教的な類型や，戦争中にあったように国家の発展のためは勤勉に働く，いわゆる滅私奉公型や，戦後にみられる利己主義的な営利本位の勤勉さや，会社や組織の伸展のための

労働尊重や人間関係がとかれるようになってきた。これらの変遷の中に，種々の形態を見出すことは出来ても，基本的には，労働の意欲は，個人または集団の利害に依存し，一歩高次の究極的な価値からこの世界における人間の労働の意味を吟味し，これに光を与えることは殆んどなされなかった。

こうした点から，基督教の労働観をみるときに，歴史の中に啓示された人格神の働きに応答して，人間が土の器ながら神の栄光のために働くという尊厳と意味とがつねに強調されていることに特色を見出のである。聖書の中には人間の怠慢を誡めている教えが少くない。たとえば，詩篇，128·2やアモス書6·4—7などには，人間が肉体的労働をなすことがいささかも軽んぜられず，怠惰な生活や富者が安逸にふけることが厳しく戒められている。さらに箴言には，なまけものにはまことにきびしいことばがある。

「なまけ者よ，いつまで寝ているのか，
　いつ目をさまして起きるのか。
　しばらくして眠り，
　しばらくまどろみ，
　手をこまぬいて
　またしばらく休む」

（箴言6・9—10）

「なまけ者よ，ありのところへ行き，
　そのすることを見て，知恵を得よ」

（箴言6・6）

さらに，使徒パウロは，その書簡において

「働こうとしない者は，食べることもしてはならない。」

（テサロニケ第23，10）

とまで極言している。この言葉はのちに，働く人たちの運動のスローガンとしてたびたび用いられてきたが，聖書の労働観に基づいているのである。

この場合，キリスト教信仰においては，労働の尊重をなすあまり，ただ働けばよいと言うのではない。さきに引用したテサロニケ人への手紙でパウロが主張していることは，他人に迷惑をかけずに，福音の役者としての働きを完了す

るために，手づから労働しながら伝道したことをのべている。この場合，天幕づくりの仕事自体が尊いのではなく，それは，彼がそれによってパンを得て人間としての独立の家計を営むための手段でもあった。労働は，いろいろの苦痛や煩いを伴っており，決してなまやさしく甘美なものではない。とりわけ，「堕落」ののちの世界においてなされる人間の労働には幾多の苦しみが伴っている[4]。このことは，技術が進んでゆくこれからの社会でも同様に考えられる。仕事に伴う苦痛の性質は新しい労働条件のもとに変ってくる。新しい種類の問題や重荷が職場の中に生れてくることも事実である。労働に伴う苦しみや煩らいにも拘らず，各自が怠慢におちいることなく，手づから働き，その勤労の実を食うことは，人間として当然なすべきことである。額に汗して働く労働は，決してさげすまれるものでなく，それは，人間としての当然のつとめである。聖書において重要な役割りを果す人物は，哲学者，将軍，貴族，王族などから出てくる場合もあるが，手ずから働く人々から出てきていることは前述のギリシヤ社会の考えと対比すると興味深いことである。イスラエルの最初の王，サウルは「牛おいの少年」であったし，ルツは異邦からきた落穂ひろいの婦人であったし，ダビデは牧羊者であり，アモスは農夫であった。そして，イエスの弟子たちの多くは，漁師としてガリラヤの湖畔に働く者たちであった。

最も興味深いことは，神自身がこの世界に自分をあらわし，人間となったとき，ナザレの大工となったということである。福音書は，このことをなんら躊躇せず蔽うことなく証言している。リチャードソンはこの事実の意味についてこういっている。

「神が人間の救いのために，自から人間となり，王や政治家や将軍，哲学者，祭司，ラビ等ではなく，一寒村の大工として受肉し給うた事を教会はどうでもよい問題だと考えてはならない。さて，神が受肉し給う時，為政者や哲学者を避け給うたということは，かれらの仕事が，価値低きものであるというのではない。ただ神の謙遜と労働の尊厳とを強調するのである[5]。」

大工という職人の仕事にたずさわる人間として主が働き給うたということは，今日の産業社会においても大きな意味をもっている。すなわち，労働は善き人間の生活に欠くことの出来ない尊敬すべき要素であり，人間が当然果すべきつ

とめであるという，平凡な，しかし本質的な労働に対する態度を形成するのである。聖書がまずわれわれの労働に対して与えているものは，労働の内容の問題ではなく，労働の場に対する基本的な態度である。

労働の目的

歴史に働く神の働きへの応答として，労働に対する積極的な評価をわれわれは聖書の中に学ぶことが出来る。それは，決して，われわれのなす労働の内容の賞讃や評価に直接にかかわるのでなく，労働の場に対する積極的な態度を形成するものである。たとえば，非常に暗く，封建的な環境で働いている労働者に対して，労働は尊いのであるから，額に汗して働きなさいというのではない。相対的な労働の内容に対しては，全体的視野に立って，具体的な検討がなされねばならない。聖書に根ざした基督教信仰が与えるものは，矛盾と困難，単調さと疎外の要素が多かれ少かれ混合している労働の場に，人間として隣人達と共に働き，生きる基本的な姿勢と態度であって，個々の労働のやり方とか組織や経営の仕方などは，それぞれの分野の人々の技術的修錬や経験に負うところが少くない。聖書は，鉄工所の配置転換の青写真を出さない。技術的な知識や経験を生かして，働く目的を聖書は与えるのである。

なぜ人間は働くかというという問いこそ聖書がもっとも関係する問いであり，その目的の実現にいかなる態度で働くかという働く姿勢の形成にあたってキリスト教の信仰は独自な見解を提供するものである。

なぜ人間は働くかという素朴な問いに対し，「働くために働く」という考えをとるなら労働を無批判に背定した労働至上主義となる。この場合，人間の労働の積極的な評価があるにも拘らず，労働者は，「働く者」であることをやめ，「働く物」となって了うと思う。人間にとって，働くことは当然果すべきつとめであるが，働くこと自体が人生の目的ではない。若しそうであるなら，老人とか病人は，人生における希望をもつことは出来なくなるし，人間は働く機械とあまり変らない存在となって了う。

また，「パンのために働く」という人があるとするなら，それは，労働の一部のはたらきを評価して全体の，あるいは，究極的な目的を把握していないこ

とになる。先述のごとく，自分で働いて自分の生計をたてることば人間として当然なすべきつとめである。しかし，パンを得ること丈が労働の目的ではない。「人はパンだけで生きるものでない[6]。」若し，パンを得ること，物質的なたのしみや欲望の充足のみが人間にとって労働の目的であるとするなら，営利追求主義や唯物主義の立場と本質的にはなんら相違しないものとなる。たしかに，われわれの日常生活において，物質は必要欠くべからざるものであり，われわれは，「パンなくして生きるものではない。」ちようど，船が一つの港から他の港にむかって走る場合，重油をたいて志るように，人間も生きるためにパンを必要としている。船が重油をたくために走るのではなく，港に向ふために走るように，人間の労働は単にパンを得るため丈に存するのではなく，パンを得て，人間としてこの世に生きるために働くのである。

聖書は，労働を含む人間の全存存を，キリストに従うからだの働きとしてとらえている[7]。この場合，三つの重要なアナロジーが労働との関係において含まれている。その第一は，頭と肢との関係であり，第二は，肢体相互の関係であり，第三は，からだの成長と革新の問題である。第一は，労働と愛の関係をあらわし，第二は，組織体における相互関係をあらわし，第三は，労働の場における人間の内的な希望の問題をあらわしている。

労　働　と　愛

キリスト教信仰においては，労働の目的は愛である。それは，われわれの全存在の目標であり，神の啓示の内容でもあった。からだのアナロジーはこの真理を，頭と肢体という関係においって表明している。キリストは頭であり，教会はその体である。肢体はその頭なるキリストに従う。「かしらなるキリストに達する」ために，からだの部分は働くのである[8]。かしらであるキリストの働きは，人間に対する愛である。彼は，かしらでありながら，しもべとなって，人間の全人格的な解放のためにくるしみを受け，よみがえって，罪と死にいたる「すべての支配，権威，権力，権勢」にうちかち，それらのなわめから人間を自由にされた。このかしらに従うこと，かしらのあとに従って，かしらのようにしもべになって隣人たちの間で人間の回復のために生きることが重要な課

題となる。新約聖書において倫理がとかれる場合「ごとくに」または「ように」ということばで，かしらとしてのキリストの働きと肢体としてのわれわれの働きが結ばれている。「主もあなたがたをゆるして下さったのだから，そのように，あなたがたもゆるし合いなさい[9]」「神がキリストにあってあなたをゆるして下さったように，あなたがたも互にゆるし合いなさい[10]」「キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを，あなたがたの間でも互に生かしなさい[11]。」

キリスト者は，キリストをかしらとして，彼に従って，そのおかれている場所で働く肢体である。「信仰によって，キリストがあなたがたの心のうちに住み，あながたが愛に根ざし，愛を基として生活する[12]」ことが，キリスト者のねがいである。労働の場はその生活の重要な部分として，愛を実現する場として存在している。精神病理学の権威であるフランクルのつぎのことばは，味合うべきことばである。

「もし愛が欠けるならば，労働は代用物になり，もし労働が欠けるならば，愛は阿片になるであろう[13]。」

急速に進みつつある技術社会においてこのことは重要な意味をもっている。技術は(Technology)人間の目的を問うている。科学は，実証的に，自然についての経験的な知識を集め，之を一つの体系に整理する。技術は科学的知識を用いて，ある目的のために応用する働きをいう。その目的によって，技術は善のためにも悪のためにも，用いられる。オートメーションの適用によって，人間の生活に福祉がもたらされることもあるし，それによって被害のおきることもある。重要なことは，技術自体が自ら用いられる目的を決定しないということである。世界教会協議会のニューデリー大会の報告書はこの点についてこう語っている。

「特定の科学的な発見をいかに用いるかという決断は，科学的な決断ではなく，倫理的な決断である。十分な科学的，技術的理解にもとずくなら，それは知的なものであり，人間に仕えようとする意志にもとずくものであるならば善いものである[14]。」

このことは，逆にいうと科学技術が進めば進むほど，人間は何のために生き

るかという目的が明確にされる必要がある。イギリスの産業社会の技術の問題について過去4年間専門家達が検討をなし，その結果をまとめた書物，(Technology, Community, and Church[15])においては，「人間の社会目的が技術をいかに用うるかをきめるものである[16]」と記されている。

技術の進歩とキリスト教信仰は二者択一の関係にあるのではない。両者は，知的にして，倫理的によい決断をするために，協力することが必要である。具体的にいうならば，「人間の本質と人間に対する神の目的を科学者がより深く理解するように教育がなされ，実業家や行政官や神学者などに対する教育において，科学についてのある程度の理解をなすようにつとめることが必要である[17]。」

基督教信仰は技術の発展をはばむものでもなく，それと絶縁をなすのでもなく，むしろ，神の賜物である理性を充分に用うることをすすめ，技術の発展を促進するものである。そして，技術は何の目的のために用いられるべきかをつねに人々が考え，愛のため技術が用いられるように人々の関心を喚起するのである。からだのアナロジーにおいて，さらに明確に示されることは，キリスト教信仰における愛は，精神的な愛，抽象的な愛でなく，具体的な全人格的人間に対する愛である。「からだ」というとき，それは，全人格的なこの世に存在「全連帯的な人間をいう。単に，精神的な，霊的な面における人間ではなく，する人格的な人間」のことをいう。キリストのからだとして建てられるキリスト者の交りは，「全人格的に成熟した人間」(Mature manhood) としてかしらに達するまで，愛にあって真理を語りつつ成長するのである[18]。」

ボンヘッファーは，キリスト教倫理を「形成の倫理」とよび，その形成とは，教会においてなされるキリストの形の形成をさすことを指摘している。

「キリスト教倫理の出発点は，キリストの体であり，教会の形の中でのキリストの形であり，キリストの形のできることを目指す教会形成である[19]。」

キリストは抽象的な人間を愛されたのではなく，具体的な人間，現実の社会において，苦悩し，たたかい，きづつき，欲求し，嫉妬し，憎しみ，悲しむ，「現実の人間」(wirklicher Mensch) を愛された。彼の愛は，人間が肉を去って精神につくことでもなく，この世を去って彼岸に遁れることでもなくまた，善

についての理念を知る人になるのでもなく。この世の中にありつつ，神の前におけるリアルな人間となることを内容としている。人間をとりかこむあらゆる重荷と束縛から人間を解放して，人間を，人間となし給うた同じ形に形成することに神の愛の姿があるとするなら，それは，新しい人間尊重をささえる基盤となる。労働の場において今日もっとも必要なのは，福音に根ざした新しいヒューマニズムを展開してゆくということであろう。

「われわれが現実の人間として生きることを許され，また現実の人間がわれわれと共に生きることを許されている根拠は，繰り返して言うように，ただ神が人となり給うたという出来事，人間に対する神の測り知りえない愛の中にのみあるのである[20]。」

労働と交り

今日は，組織の時代とも言われ，それぞれの職場にあって，個人が独立して働くのではなく，たがいに相互依存の関係に立って，仕事をなしている。個人の利益を守るためにも，個人は孤立することを許されず，組織の中に参与して，連帯的な交りの中に，個人の自由と幸福を得るようになっている。この場合に，いくつかの要因から組織の円滑な運営がはばまれることが多い。

その一つは，近代的な組織は形の上でつくられても，実際に働いている考え方や生命は依然として古い時代のものである場合がある。ちょうど，近代的な洋服を着ているが，その中のからだには至って封建的な血が流れているように。紡績工場の設備は近代的な装をもっているが，その中で働く女工さん達の考え方は，農村を背景としてきわめて閉塞的であり，企業の体制も，上下の支配関係によって規定されていることが少くない[21]。上下の支配関係によって日本の社会は長い間培かわれてきたし，個人の自由と人格の尊厳が叫ばれるようになってまだいくばくもたっていない今日，組織の中に封建的な人間関係の存在していることは事実である。産業社会の発展の中で，古い人間関係を新しいわくの中で存続させることも可能である。しかし，新しい社会の進展によって，人格と人格と尊重しあう水平的な人間関係の形成がなされる機会の存していることも事実である。労働者が長年住みなれた農村を去って都会に移り，産業社会

で働き独立の家計をもち，組織労働者として組合を通して働き，自分たちにとって重要な課題は，団体交渉において相互の意見が交換され決定されるようになる。彼の息子の代になると，都会で教育を受け，他人と話しあいながら共同の決定をする習慣を一段と身につけてくるようになる。これらの変化の中にいろいろの問題も起きているが，本質的に考えると，人間と人間とが上下の支配関係によってではなく，相互の人格をみとめあった対等の信頼関係において働き生活するように少しでもなることはよろこぶべきことであると思う。

ここでも，からだのアナロジーは人間と人間の交りに示唆を与える。それぞれの肢体が勝手に自己主張してバラバラになって了うのでもなく，一つの支配体制によって個としての独自性をなくして了うのでもなく，それぞれの賜物と役割を尊重しつつ，「全身はすべての節々の助けにより，しっかりと組み合わされ結び合わされ，それぞれの部分は分に応じて働く[22]」というからだの成長のイメージがえがかれている。これは，単に教会の中における交りについていわれていることではない。教会の交りは，来りつつある神の国の「まえぶれ」として，社会に一つの生きたみちしるべを与えるものである。

科学技術がすすんで来るとき，とりわけ，肢体の相互における連帯性と責任意識が強くならなくてはならない。オックスフォード大学の数学の教授であるクールソン博士は，科学技術の時代にあって，基督教信仰の貢献するものは，この時代の人々に人間相互の連帯性を与えることと，人間として生きる希望を与えることの二つをとくに強調している[23]。科学技術が進展するにしたがって，それぞれの専門の技術が発達する。オートメーションの一つの決定的な影響は，いままで肉体的な単純労働は機械がかわってするので，人間の労働は次第に技術をもった労働えと移ってゆくことである。肉体労働者が次第に減り，知識労働者がふえるようになる[24]。学問の分野でも，それぞれの専門の領域に分れるように，産業社会も技術の発達にしたがってますます，それぞれの専門職に分かたれるであろう。

昔，病院を経営をするに医師と看護婦がおれば一応事はたりたが，今日では，薬剤師，レントゲン技師，営養士，保険業務担当者，カウンセラー，ケース・ウォーカー・保健婦，会計士，ボイラーマン，ハウス・キーパーなどそれぞれ

の専門職が必要である。お互同志，同じ医療にたずさわっている肢体であるが，相互の協力関係は必ずしも円滑にすすんでいない。むしろ，お互同志意志の伝達や相互理解は果されず，ひがみとゆがみが専門職のグループの相互にあることは否定出来ない。オートメーションがすすむに従って，知識労働者と肉体労働者の間に大きな溝がきずかれてゆくにちがいない。さらに，巨大な設備投資をなして，生産性をあげ，賃金や福利施設を改善してゆくことの出来る大企業の労働者と，物価の値上りに追いつくことが出来ず実質的にはベースダウンの形でますます苦境になやむ未組織零細企業にいる労働者の間の格差が広がることも事実である。この場合，重要なことは，その職種の如何にかかわらず，偏見にとらわれず，排他的にならず，お互に他者をパートナーとしてうけいれ，共同の責任を果すために，互に理解しあい，あるときは正しあい，あるときは協力しあって，それぞれの部分の賜物を充分に生かすことの出来るいきいきとした連帯的な関係を形成することである。ここにおいても「キリストを基として，全身はすべての節々の助けにより，しっかりと組み合わされ，結び合わされ，それぞれの部分は分に応じて働きからだを成長させ，愛のうちに育てられていくのである[25]」というからだのアナロジーはきわめて意味深いものがあると思う。

このからだの比喩にあらわれている組織の有機的な連帯性は，闘争至上主義を排除すると同時に，単なる妥協と人間の善意による調和を意図するものではない。このからだのイメージの根幹にあるものは，「キリスト」であり，からだの有機的協力関係も「キリストを基」として形成されるものであり，それは隣人の全人格的な人間性の恢復のために僕となってなやみを共にするという苦難の過程を伴うものであることを忘れてはならない。

労働と希望

精神病理学者として，労働の問題を検討したフランクルは，失業者が失業神経症になる原因を分析し，「失業神経症は決して失業の直接の結果ではない[26]」ことを指摘してつぎのようにいっている。「われわれが試みた失業神経症の実存分析の視野からみれば，失業という同じ状況が様々な人間によって異なって形成されることは明らかである。すなわち，一方は社会運命に屈従し，他方は

そうでないのである。したがって各々の失業者個人はどちらのタイプに自分を入れるべきか，常になお決断しうるのである[27]。」

失業をとり除くためには，完全雇傭のなされる社会をきずくことが重要であることは論をまたない。多くの場合，失業は外的な事がらによって起きる。しかし，同じ外的な条件の下に失業している二人の人がいるとき，一人は，内的使命感を欠いているために失業神経症にかかり，失業の機会を失い，他は，内的に自らを堅持してゆくなにものかを持つ故に，無感動になった失業者にくらべて就業の機会をより多くもつという。失業の結果，失業神経症におちいる場合もあるし，反対に失業が神経症の結果に訪れる場合もある。からだの内的な構造が喪失することによって，外的な有機的な崩壊現象をおこす場合もある。いままでは，生き甲斐をもって仕事をしていた人が，停年退職して，急に老衰現象をとるということもある。

からだのアナロジーをとると，からだは成長するものであり，愛のうちに育てられるものである[28]。これは，単に肉体的な外的な成長丈をいうのでなく全人的成長である。そして，その様な成長の基には日々に新しく，「古い人を脱き捨て，心の深みまで新しくされて，真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しい人を着る」という，究極的な生命に向けられた内的な革新が存在している。

現代人は，労働に生き甲斐を覚えず，生活の内容に張りあいを見出すことが出来なくなると，惰性的な毎日の仕事のくりかえしにあきあきして来る。彼は次第に内的には躁病的となり，社会的には健忘症[29]となり，外部のことがらに対して無関心となってゆく。自分の生活や労働の無目的性，無意味性にたまらなくなり，それから逃れるために，彼は歓楽街へと逃避する。スポーツがそれにかわることもあるし，恐ろしいスリルをもった犯罪小説や，センセーショナルな映画や，災害や他人の死すらが，逃避の場となる。このように自分自身の実在の深みに古い人が停迷し，空虚さの中に，漠然と生活の車を廻転させることが多くなってきている。生活の停滞とか灰色のムードといった表現が，今日の都会人の内なる人の表情となる。フランクルは，このような状況を分析したのちこういっている。

「しかし，人生においては到達したことに満足することが重要なのではない。常に新しい問題をもって迫ってくる人生は，われわれを決して安んぜしめないのである。ただ自己を麻痺させることによって，つねに新たな要求をもって人生がわれわれの良心の中に感じさせる刺戟から自らを無感覚にしているのである。立ち止まる者は追いこされ，自己に満足する者は自らを失うのである。したがってわれわれは到達されたものに常に満足すべきではない。毎日毎時が新しい行為を必要とし，新しい体験を可能にするのである[30]。」

聖書は日々に新らたに生きる内なる人の姿をえがいている[31]。使徒信条でいう，「罪のゆるし，からだのよみがえり」ということは，単に，終末のときの期待ではなく，キリスト・イエスにあってすでにおきた出来事であり，その光の下に，今日もわたしたちの地上の生活の中で実現されている永遠のはたらさに対する信仰の表現なのである。ここに，キリスト者の成長と更新をささえる希望が存しており，それは，日々に新しくキリストと共に死して生きる信仰に根ざされているのである。このように全人格な存在として，日々に新らたに生きる逞くましいキリスト者を形成する働きとして，キリスト教共同体における訓錬と礼拝の意義が存しているのである。

1) G. E. Wright. God who Acts, 1952。
2) アリストテレス「国家論」小田信士，労働と福音 p. 4 参照。
3) 小崎弘道，政教新論[2] 1888, P. 23～24。
4) 創世記 3：17～19。
5) Alan Richardson, The Biblical Doctrine of Work, 邦訳，p. 42.
6) マタイ 4：4。
7) エペソ：1：15～22, 4：1～24，ローマ 12，コリント第一，12 など，John A. T. Robinson, the Body, 1952, SCM, 邦訳，からだの神学，参照。
8) エペソ 4：15。
9) コロサイ 3：13。
10) エペソ 4：32。
11) ピリピ 2：5。
12) エペソ 3：17。
13) Viktor E. Frankl, Aerztliche Seelsorge, 邦訳 p. 142。
14) 世の光，キリスト，59頁。
15) H. Cunliffe-JONES, Technology, Community and Church, 1961。

16) "Man's social purpose determines his use of technology," Ibid, p. 75。
17) 世の光キリスト，59頁。
18) エペソ 4：12～15。
19) ボンヘッファー，現代キリスト教倫理，p. 38。
20) ボンヘッファー，前掲書，p. 27。
21) 塩沢美代子〃労働運働におけるキリスト者〃，石田のぞみ，〃紡績工場寄宿舎における体験〃，基督教研究第33巻第2号所載。
22) エペソ 4：16。
23) C. A. Coulson, Sciencee, Technology and the Christian 1960。
24) Peter Drucker "Our Emerging Iudustrial Soirety." address at Fourth National Study Confereme on the Church and Economic Life, 1962。
25) エペソ 4：16。
26) フランクル，死と愛，p. 140。
27) Ibid.
28) エペソ 4：16。
29) Gibson Winter, The New Creation As Metropolis, 1963, p. 137。
"Social amnesia is Perhaps the mort striking type of morbid forgetfulness in suburbia. There is deep forgetfulness of our commn humanity, for the suburb is created as a wall against soical differences."
30) フランクル，前掲書，145頁。
31) コリント第二 4：16～18。